# 「酒との出会い」

## 永井　一史会員

まずは、皆さまに伝統ある東京お茶の水ロータリ―クラブへの私の入会を認めていただき感謝申し上げます。皆さまと力を合わせ、ロータリーの精神を実践して参りたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。またこのようなイニシエーションスピーチの場を頂き大変光栄に存じます。

私は父側の祖父が群馬県の沼田の出身で、その実家が「永井本家」として今も酒造りをしており、その銘柄は「利根錦」と言います。明治２８年創業です。基本的には群馬県内でしか販売されておりませんので、皆様の中で「永井本家」「利根錦」という名前を耳にされた方がおられましたら大変幸甚です。実は沼田の近くには「水芭蕉」という銘柄を醸造している「永井酒造」という酒蔵もありますが、こちらも親類筋にあたります。

私は酒造りの血を受け継いでいるせいか、色々な方とお酒を飲みながら多くの方とお付き合いをすることが楽しみとなっております。私は日本酒からビール、焼酎、ワイン等何でも相手の方に合わせて飲みますが、やはり血は争えず日本酒が一番好きです。それも最近は純米酒の熱燗が一番と勝手に思い込んで飲んでおります。

更に申し上げますと色々日本酒は飲みましたが、永井本家の宣伝になってしまい申し訳ありませんが、永井本家の「利根錦の純米酒」の熱燗が最高です。因みに利根錦は新潟の杜氏をお願いしていますので、新潟の有名な越の寒梅と同じ口当たりであっさりしています。「杜氏は世襲制で麹や作り方は門外不出」と言われています。

余談ですが、「利根錦純米酒」の熱燗を飲む場合、冬の寒い時期には徳島県の「すだち」を絞って純米酒に加えて、それを熱燗にしますと、味わいも深まり大変おいしいです。かつ体にも良いと勝手に思っております。是非皆様もお試しされたらと思います。私は、成人になって酒を飲み始める時にある大先輩から「どのくらい酒を飲んだら自分がどうなるかをしっかり知る必要がある。酒を飲めば人は誰でも酔う。酔って行った言動が自分の一生を取り返しのつかないことにしてしまうこともある。このような誤ちを犯さないためにも、酒に対して自分の限界を知っておく必要がある。また酒は一人で飲むものではない。必ず相手があり目的があって、そこに酒がある。だから酒を飲むときは必ず攻めか、守りか、楽しみか、この３つの目的意識をもって飲まなければならない。酒は無意味にだらしなく飲むものではない。」と言われました。

更にその先輩から自分の飲める酒量の限界を判断するやり方を伝授されました。

そのやり方は①一合入る徳利に日本酒を一合正しく入れる②つまみはコップに入れたおでんの汁を割り箸で浸けてなめるだけ、この①②を繰り返しながら何本(何合)飲めるか、その判定は立ち上がった時にフラッとした時点が自分の限界とし、その量を知っておくことでした。私はこのやり方で自分の限界酒量を把握しました。このやり方で自分の飲める量が分かり、自信と安心をもって酒を飲めるようになりました。是非皆様もお時間がございましたら同じやり方で自分の酒量を判断されてみられたらいかがでしょうか。

自分にとって酒は人とのお付き合いの力であり、自分の人生は酒なしに語れません。酒のお蔭でお客様、先輩、同輩、後輩との輪が広がりました。最近では、ゴルフもゴルフの後の 19 番ホールの方が楽しみで早くプレーを終えてと思うとスコアーどころでなくなってしまい・・・。

医者からは酒が飲める間は体は大丈夫と言われています。これからも美味しい、楽しい酒が飲める様に体には気を付けて行こうと思います。また酒造りの血が流れているのも何かの縁と思い、酒との出会いを大切にしていきたいと思っております。

失礼を省みず、取りとめもない内容で大変恐縮致しておりますが、このような機会を頂き感謝致しますとともに、ロータリーの皆様方との親睦と奉仕活動を通じて世の中に貢献できるよう微力ではございますが、努力したいと思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

**利根錦［純米酒］**

杜氏が心技を極め、手造りにこだわった自信作です。さっぱりとした口当たりの中にも、純米酒の旨味が溶け込んでいます。

## 木宮　雅徳会員

山下会員様のご紹介で入会しました木宮雅徳です。私にとって「お茶の水」は、学生時代からの大変、馴染みのある場所です。そのお茶の水のロータリクラブに入会できたことは、大変光栄なことです。

私は、父親が九州の宮崎出身、母親が日本領時代の台湾生まれで熊本県育ちの両親のもとで、父親の仕事の都合で和歌山県の新宮という田舎町で育ちました。和歌山は、日本三名瀑の那智の滝、世界遺産の熊野古道、温泉街でパンダも数頭いる白浜など、美しい自然が豊富な地域で育ちました。

10 歳の時に、新宮市三輪崎という田舎から、和歌山市に移り住むことになりました。当時の日本は、大阪万国博覧会の開催など、高度成長まっ盛りの時代でした。カラーテレビ、自動洗濯機、ラジカセなど家電製品が大量消費された時代でもあります。
私自身は、12 歳の時に新聞の懸賞で当選し手に入れた、ソニーのラジカセのお陰で、ラジオの虜になっておりました。

70 年代の若者に大きく影響を与えたのは、ラジオの深夜放送でした。「オールナイトニッポン」「パックインミュージック」「セイヤング」などの人気深夜放送では、お笑い芸人やフォークシンガーなどが、ラジオのパーソナリティとして様々なメッセージを発信し、私の中学・高校の日常の生活に大きな影響を与えたのでした。

そんな田舎町での生活から夢いっぱいで 18 歳で上京し、駿台予備校に入った私でしたが、大学受験では３浪し、大学でも３留するというその後の生活など、当時は夢にも思いませんでした。３浪後の大学生活は、３歳も年下の現役生とのギャップですぐ不登校になり、アルバイトやバンドサークル、学生企業などに没頭しました。80 年代は好景気にも支えられ、テレビ、雑誌のメディア全盛期の時代でした。

私は、メディア系の学生企業の立ち上げに参加し、フジテレビの「オールナイトフジ」「なるほどザ・ワールド」、集英社の「ヤングジャンプ」「週刊プレイボーイ」の制作のお手伝いをするようになっており、雑誌のライターおよびテレビ番組の構成作家として活動しました。

1988 年、大学卒業と同時に、雑誌企画制作、広告企画制作、ＰＲイベント企画などを中心にクリエイティブ・プロダクション「株式会社ブレーンバスターズ」を設立。 雑誌メディアを中心に、モータースポーツからコンピュータゲームまで、幅広いジャンルで活動しました。

1995 年より 96 年まで、フジサンケイグループ「ポニーキャニオン」が出資する、マルチメディア専門学校「アミューズメントメディア総合学院」のデジタルメディアラボの所長を務め、マルチメディア（ゲーム、CD-ROM）やインターネットなどのコンテンツ企画開発などを積極的に手がけました。

1999 年より、携帯電話向けのモバイルコンテンツビジネスをスタートし、「ｉモード（ドコモ）」「ＥＺｗｅｂ（ＫＤＤＩ）」などへモバイルコンテンツを企画開発し、集英社、タイトー、avex、京セラなどへソリューション提供しました。

2002 年 KDDI と海外コンテンツ事業で提携すると同時に香港法人を設立し、香港、中国など GSM 型携帯電話向けのモバイルコンテンツ配信事業をスタートする一方で、2003 年には、日本最大のスタジオジブリ専門ショップをお台場に開業。インターネット通販とリアル店舗の連携を模索しました。2003 年には、中国・広州代表事務所設立、2006 年には、浙江省杭州市に中国法人を設立し、デジタル漫画の総合的な制作ラインを確立するも、時期尚早と日中問題などの諸般の問題で 2009 年に中国事業から完全に撤退しました。

2009 年、スマートフォン市場と電子書籍の急成長を背景に、デジタル漫画プロデュース会社、株式会社ジーツーコミックスを新規に設立し、世界約 70 か国でトップランキングを獲得。 2013 年、株式会社ブレーンバスターズにて、電子出版ソリューションをベースとし、アジア市場をターゲットとしたインバウンドプロモーション事業「リトル AKIBA プロジェクト」をスタートし、台湾、タイ、インドネシア、フィリピンなどでクールジャパンイベントに参加し、プロモーションを展開中。　現在に至ります。

経済成長が大きい ASEAN からの来日観光客の増加は、おそらく地方創生の一助になると確信しております。2020 年の東京オリンピック後の地方への外国人観光客の誘客を目指し、より効果的なインバウンド・ソリューションを確立していきたいと思っております。

最後に、お茶の水ロータリークラブに入会させていただいた貴重なご縁を大切にし、会の発展に少しでも寄与できるように頑張りたいと思っております。　まだまだ右も左もわからないことが多く、もろもろご教示いただければ幸いです。

皆様、あらためてよろしくお願いいたします。

**閉会点鐘**　　**小田　孝志会長**

創　立／1993 年 10 月 13 日(平成 5 年)
事務局／〒102-0073 東京都千代田区九段北 1-2-2
ｸﾞﾗﾝﾄﾞﾒｿﾞﾝ九段 906 号
Tel：03-3288-7300 Fax：03-3288-7400
E-mail：ocha-rc@sirius.ocn.ne.jp
http://tokyo-orc.jp/

例会日 毎週水曜日　12:30～13:30
例会場 ホテルグランドパレス　Tel：03-3264-1111
会　長 小田　孝志　　幹事 奥山　聡
会　報 八木　壮一（委員長）松島　健（副委員長）
大原正道 佐々木啓策 山下秀一 山下憲男(委員)